

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 佐々木 誠

論文題目 「自由設計」型集合住宅の建築計画的な研究

集合住宅での定住が一般化し、それを志向する層が目立ちはじめた現在、民間事業者が販売や建設上の効率などから、対応の範囲は未だ限定的ではあるが「オーダーメイド」「フリープラン」「設計変更」「自由設計」などと呼んで、入居者個々の要望に応じた住戸プランの注文設計・設計変更に応じる事例がある。本論文は、自由には様々な意味で制約が存在することを前提として、このような「自由設計」における「制約」からかたちづくられる「枠」がどのように構成されているかをいくつかの側面から整理し、入居者を中心とした時間の流れを含めた総体としての「意志決定の枠組み」と「専門家の役割」を明らかにして、今後の集合住宅の建築計画に資することを目的にしている。

論文は全5章から構成される。第1章では研究の背景と目的、そして調査の対象を示している。第2章では集合住宅の住戸計画上の課題の整理、第3章では「自由設計」の供給者と利用者との関係、第4章では意思決定プロセスについて考察を行っている。第5章では、全体の総括的な考察と結論を述べている。

1章では、まず自由設計型の集合住宅に関連する先行事例、関連する視点・概念を整理・考察している。また、自由設計における住戸設計上の「制約」として、「物理的要素」として建築空間上の諸問題、「人的要素」として入居者・専門家の関係、そして他の要素との関わり方、「時間的要素」として意志決定のプロセスを検討項目としてあげ、研究の視点を明らかにしている。

2章では、空間形成の基本的要素として物理的要素に注目し、自由設計の制約や内容の構成について明らかにしている。住戸設計への強い影響要素として、「階・アクセスあたりの戸数」や「単位面積あたりの外接壁延長」「水まわりレイアウトと室構成」などを指摘している。70㎡程度の分譲住戸ユニットは、間口が狭く水まわりが外接しない3LDKの平面型に定型化している現象が確認している。また外接壁面の数が水周り配置の選択肢と平面計画上の自由度に大きく影響していることから、住戸設計の自由度確保には、外接壁面を多く確保する住棟計画が有効ではないかという仮説を提示している。

3章では、自由設計に関する人的要素、すなわち自由設計の意志決定主体の入居者、そして枠組みを設定しプロセスを支援するコーディネイター、建築に直接関わる設計者を採り上げている。物理的空間構成だけでなく、それをどのような枠組みとプロセスでつくり上げるかも重要であり、入居者と専門家が必要な時期に情報交流を行い、意志決定を行うこと、設計コーディネイトとスケルトン・インフィル設計は、制約として事前設定された企画・役割の兼務が関わり、多量の業務や時期的制約が想定以上なる場合もあること、前提条件の設定・共有、支援専門家の能力・経験が重要であることを明らかにしている。

4章では、調査対象の集合住宅について、設計や建築生産現場、竣工後の入居者の生活、全てに関わる時間的要素に注目している。つまり、物理的要素や人的要素を包括した要素であり、プロジェクトごとのプロセスの違いから、自由設計の枠や制約として、期間だけでなく設計者をはじめとする人的要素の支援体制を含む総合的な要素であることが明らかにしている。自由設計では、入居者による建物をつくるプロセスへの参加が最大の特徴であるが、建築家は時間的なコントロールについて入居者を支援して、制約の範囲を検討し、専門家としてよい方向に誘導すること、そして、それらを事前に明らかにして入居者と共有することが重要であることを明らかにしている。

5章では、1章から4章を総括し、自由設計の自由度を確保する様々な制約の構成様態を整理し、意志決定主体や枠と内容の中間領域のなかに「利用」「所有」「意志」などでズレが存在し、これらの関係を明確にすることが企画や計画プロセス上の要点であり、プロジェクトの特徴となり、価値を高める可能性を秘めていることを論じている。

最後に、これらの考察から、一見魅力的な「自由」は、それに伴う負担があり、それを、「制約」とそれらを構成する「枠」として積極的に捉えることにより、集合住宅の住戸入居者が積極的に関わる「自由」を享受することができることを確認している。そして、SI方式や生産技術、コーディネート技術などの発展が今後この方向性を支援するためには不可欠であることを指摘している。

以上のように、本論文は、都市部における主要な住居環境を形成する集合住宅において、居住者の意思を住戸に反映するための方式の一つとして「自由設計」方式について基本的な知見を明確に示して、建築計画学の発展に寄与したものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。